第13章　動物

13－1　概説

調査対象となる動物は、哺乳類、鳥類、は虫類、両生類、魚類、昆虫類、節足動物及び軟体動物等である。

本県の垂直植生をみると、亜熱帯性植生（南予沿岸のごく一部）、暖温帯林（カシ林　海岸～標高 1,000m）、中間温帯林（モミ・ツガ林　標高700～1,200m）、冷温帯林（ブナ林　標高1,000～1,700m）、亜寒帯林（シラベ林　標高1,700～1,980m）が見られ、林野面積が県土の71%を占めるため、豊かで多様な植物相を形成している。植物の多様さを反映して、動物種も多様で豊かな動物相が見られる。

環境庁の調査（1981年）による県内の学術上重要な哺乳類、両生・は虫類、昆虫類、淡水魚類は、表13－1のとおりである。

表13－1　学術上重要な哺乳類、両生・は虫類、昆虫類、淡水魚類

哺乳類	ニホンザル、ニホンジカ、ツキノワグマ、イノシシ、ホンドキツネ、ホンドタヌキ、ニホンアナグマ
両生類 は虫類	オオサンショウウオ、オオイタサンショウウオ、ブチサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、タワヤモリ
昆虫類	ムカシトンボ、ハッチョウトンボ等指標昆虫類７種とイシヅチオサムシ、ミヤマカラスシジミ等特定昆虫59種
淡水魚類	イシドジョウ、イトヨ、カマキリ、スナヤツメ、イワメ

哺乳類は、調査対象種の多くが古くから里山を生息地としており、石鎚山脈や四国山地の山中だけでなく、丘陵地から沿岸部まで広く分布している。ただし、沿岸部における貴重種の確認種数はやや少ない。

貴重な両生類・は虫類は、石鎚山脈と四国山地の一部に生息地が限られている。

昆虫類は、県下全域に分布しているが、特に石鎚山周辺に貴重種が数多く見られる。一方、沿岸部における貴重種の確認種数は少ない。

貴重な淡水魚類は、愛媛県内では生息地が限られており、確認種数も極めて少ない。

13－1－1　哺乳類

ニホンザルとニホンジカは群れを作り、移動する動物群として似通った分布圏域をもっているが、ニホンジカの生息密度はニホンザルに比べずっと低い。両種とも南予の鬼ヶ城山系以南によく見られ、高縄半島山中にもある程度の生息が認められている。

ツキノワグマ及びニホンカモシカは、ほぼ絶滅したとみられる。

イノシシは、平地や石鎚山の高地を除き全県下に広く生息している。近年、イノシシによる農作物の被害が増加の傾向にある。

ホンドキツネは、もともと四国には少なくが、県下各地に広く分布している。

ホンドタヌキは、県下全域に多数の生息が確認されている。ただし、東予では山麓から山間部が主な生息域となっている。

ニホンアナグマは、ホンドタヌキに比べると非常に生息密度が低く、分布も山間部に局所的であるが、海岸近くでも生息が確認されている。

ニホンカワウソは、四国西南部が日本での最後の生息地として知られている。昭和39年に本県の県獣として指定、また、昭和40年には国の特別天然記念物に指定されたが、

昭和51年以降、本県での生息は確認されていない。しかし、宇和海沿岸の良好な自然環境の残っている一部の地域には、生息している可能性もある。本種は、国のレッドデータブックでは絶滅危惧ＩＡ類に指定されている。

ホンドイタチは、かつて県内全域に広く分布していたが、平地、低山地は帰化獣のチョウセンイタチが多く見られるようになった。

ホンドテンは、東中予の標高の高い山間部や南予の山塊のほか、海岸部でも見られる。餌となるキュウシュウムササビの増加により、天敵であるホンドテンも増加の傾向にある。

13－１－２　鳥類

鳥類は、県内で18目60科 303種（1995年３月31日）が確認されている。夏季の石鎚山系の自然林では、高山鳥で有名なホシガラスを始め、カヤクグリ、ルリビタキ、メボソムツクイ、エゾムシクイ、ビンズイ、県鳥のコマドリ等の繁殖が見られる。シギ、チドリ、サギ、カモメ類などの水鳥は、加茂川や重信川などの河口の干潟に多く見られる。カモ類は干潟のほか、ダム湖やため池にも多く渡来する。タカ類や小鳥類の渡りの中継地としては三崎半島や足摺宇和海国立公園の高茂岬が重要な役割を果たしている。

表13－２　レッドリスト（環境庁　1997年）に掲載された愛媛県の鳥類

絶滅危惧1A類(CR)	コウノトリ、クロツラヘラサギ、カラフトアウアシシギ、コシャクシギ、ウミスズメ
絶滅危惧1B類(EN)	サンカノゴイ、ツクシガモ、オジロワシ、クマタカ、ヘラシギ、セイタカシギ、ヤイロチョウ
絶滅危惧Ⅱ類(VU)	シロハラミズナキドリ、コクガン、ヒシクイ、トモエガモ、オオタカ、チュウヒ、ハヤブサ、ナベツル、マナヅル、シマクイナ、アカアシシギ、ホウロクシギ、ツバメチドリ、ズクロカモメ、コアジサシ、カンムリウミスズメ、ブッポウソウ、サンショウクイ、コジュリン
準絶滅危惧(NT)	ミゾゴイ、チュウサギ、マガン、ミサゴ、ハチクマ、ヒタカ、オオジシギ、エリグロアジサシ、カラスバト、アカモズ、ノジコ
準絶滅危惧(NT)	カラシラサギ、ヘラサギ、クロトキ、アカツクシガモ、アカハジロ、コウライアイサ、ウズラ、シベリアオオハシシギ

13－１－３　両生類・は虫類

両生類・は虫類は、ハコネサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ブチサンショウウオ、タゴガエル、ヒキガエル、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエル等が生息している。

このうち、ハコネサンショウウオ、オオダイガハラサンショウウオ、ブチサンショウウオは、石鎚山に源を発する標高800～1,400ｍの河川に生息し、タゴガエル、ヒキガエル、ヤマアカガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエルは、ほぼ全山地の林下に生息している。

13－１－４　昆虫類

本県は、長い海岸線沿いに、トベラ、ウバメガシ、タブ等の暖帯性照葉樹林に恵まれ、ヒメハルゼミ、ヨツスジトラカミキリ等多くの暖帯系の昆虫が生息している。さらに、

南予地方には、ウルシゴキブリ、カノウアブ等亜熱帯系の種が分布の北限として生息している。

一方、本県は、西日本最高峰の石鎚山系を擁するので、ツマジロウラジャノメ、スジボソヤマキチョウ、エゾヨツメ、コトラガ、フジキオビ、キンスジコガネ、フタスジカタビロハナカミキリ、エゾハルゼミ、ソウウンアワフキ等、北方系種の南限として残存している種も少なくない。これらの中には、近接する赤石山系、その他県内の標高の高い山地に点々と生息地があるものもある。

本県の貴重な昆虫類は、指標昆虫類７種と特定昆虫類59種の合わせて66種が上げられる。貴重な昆虫類の分布を市町村別にみると、面河村40種、重信町30種、松山市29種、西条市28種、小松町26種、久万町26種、丹原町19種などとなっており、石鎚山系周辺の市町村及び山地部の自然公園を抱える市町村に、豊かな昆虫相が見られる。

13－１－５　淡水魚類

環境庁の調査（1978年）によれば、県内の仁淀川（面河川）、重信川、肱川、岩松川の４河川で61種が確認されており、そのうち淡水で一生を過ごす純淡水魚は、アマゴ、ニジマス等34種、一生のある時期を海を過ごすものは、ウナギ、アユ等26種、どちらとも言えないもの１種（ウグイ）である。

なお、学術上重要な種のうち、イシドジョウは重信川の本・支流及び岩松川本・支流で確認され、また、スナヤツメは重信川の支流の内川のさらに支流大門川で確認されている。しかし、イトヨ、イワメは文献記載はあるものの、その後確認されていない。

13－１－６　貴重種及び貴重な動物

本県における貴重種及び貴重な動物は、表13－３のとおりである。

表13－３　貴重種及び貴重な動物

国指定特別天然記念物

名　　称	所　　在　　地	所有者・管理者
カワウソ	（主な生息地）愛媛県、高知県	

県指定天然記念物

名　　称	所　　在　　地	所有者・管理者
矢落川のゲンジボタル発祥地	大洲市田地から喜多山に至る	国（愛媛県）
鹿島のシカ	北条市鹿島	北条市
カブトガニ繁殖地	東予市海岸一帯	愛媛県（東予市）
ベニモンカラスシジミ	温泉郡重信町上林	（重信町）
宇和島海特殊海中資源群	北宇和郡津島町、南宇和郡内海村、御荘町、城辺町、西海町	津島町、内海村、御荘町、城辺町、西海町
大ウナギ	北宇和郡津島町岩松川	（津島町）

市町村指定天然記念物等

名　　称	所　　在　　地	所有者・管理者
砂八ツ目	松山市南高井町	保存会
日本在来野間馬	今治市野間乙１－１	今治市
ハライゼ蛍発生地	河辺村	